

じいが教えてくれたこと

富田林市立葛城中学校 三年 松村 まつむら 一奈里 ひなり

「じいの足、すべすべや。」

祖父の短くなった左足を見て、ほっと息をつき口にした言葉だった。糖尿病による合併症で私が小さな頃から入院を繰り返していた祖父は、靴擦れの悪化から左足が壊死し膝から下を切断した。

もう何年も祖父のマッサージ係だった私は、棒のようにやせてしまった足にも愛着があり、その足がなくなることや傷口を目にすることが言葉にならないほど恐ろしかった。薄い布団の中、祖父の足はどんな風に変わったのか。想像すると不安でつぶれそうだった。

「ちょっと見てみ。えらい事になったわ。」

そう言って笑い明るくふるまう祖父を心配させたくない気持ちから、必死に笑顔を作った。しかし、どれだけ頑張っても口は真横に広がるばかりで頬は強張ったまま動かない。祖父に掛けられた布団をめくるには、大変な勇気と覚悟が必要だった。じっと動かさずどうすることもできない私を見かねて、母は祖父の布団をさっと巻き取った。包帯もなく、どん、とむきだしになった短い左足を前に一瞬たじろいだだが、意外にも傷は目立たず切断した部分はとてもし上手に縫い合わされていた。足の先端（ひざ下部分）は皮膚がピンと張って赤ちゃんの肌のようにすべすべしていた。想像よりもずっと綺麗だった。祖父は膝上から残った足を軽やかに動かすほほんだ。途端に安堵の気持ち芽生え、恐ろしいものだという先入観はあっさりと私の脳裏から消え去っていった。

緊張が解け病室でゆっくりしていると、スーツ姿の男性が挨拶にみえた。私たち家族に義足の見本を持ってきてくれたのだ。手に取って見たが、人工的な色合いでずっしりと重く気後れして長く正視できなかった。だが、義足の説明を聞くうちに、これが祖父の新しい足になってくれるのかと、心強く頼もしい存在へと変わっていった。

オーダーメイドなので作るのに何ヶ月もかかるらしく、使いこなすにも時間が必要だそうだ。男性の話が終わる頃には義足をつけた祖父と並ぶ自分を想像し、その日がとても待ち遠しく感じられた。

数ヶ月後、私たちの中学校でパラリンピックのメダリストである山本篤さんの講演があった。山本さんは高校生の時にバイク事故のため左の太ももを切断したが、挑戦することやあきらめない気持ちを持ち続けることで障がい克服し、走り幅とびで世界新記録を樹立した。私たちは夢中でお話を聞き、休憩時間には遠りよなく山本さんの周りを取り囲んだ。鍛え上げられたからだに驚きの声をあげ、メダルや義足に触れることもできてその日は興奮が覚めなかった。競技用義足は美しい形をしていて、とても格好良かった。

祖父の病氣と山本さんとのふれあいから障がいがある人への意識が変化した。ハンディキャップがある人をじろじろ見るのは失礼だと言いつつ、見て見ぬふりを正当化していた弱く情けない自分。同じ人間同士であるにも関わらず心の中でひっそりと差別し、相手を知ろうともせず目を背けていた事に気付くと、胸のあたりから重苦しい何かが湧いてきて自分と向き合うことがしんどかった。なぜ私は障がいがある人は別の世界にいるのかのように過ごしてきたのか。

人は自分の知らないことや違いに、不安や恐怖を覚えるそうだ。だが、知ることでよってそういった感情は消え失せる。障がいについて知り理解を深めることは、偏見や差別をなくす確実な一歩だ。私たちの中学校では、身体的ハンディキャップや義足に対する偏見はなくなった。しかしそれはさまざまな種類がある障がいの中の一つにすぎない。知ることの大切さを胸に刻み、差別のない真の人間関係を築いていきたい。

私にたくさんの気付きを与えてくれたじいは、今はもういない。義足をつけることなく天国へ旅立った。